

# 内地・その他

## 特別幹部候補生の沖縄戦

千葉県 高田 允 夫

昭和二十(一九四五)年二月十五日、われわれ第十六航空通信隊百九十二人を乗せた大阪商船の老朽貨物船「杭州丸」は波静かな鹿児島港を出航した。行先はロコミで台湾と聞かされていた。開聞岳が次第に霞んでいった。

兵隊たちはその前日、外出が許され鹿児島市内の映画館で高峰秀子主演の『勝利の日まで』を観ていた。彼女の鼻にかかったような高い歌声と明るいいリズムが、いまでも鎮魂歌となって私の耳に残っている。

この船には中隊規模の様々な部隊、約千人が乗船していた。甲板には〇(マルレ)と呼ばれるベニア製の特攻艇が覆いをかけられて大量に積まれていた。

気付くと周辺の海域には五隻の輸送船が、それを取り囲むように進む三隻の護衛艦に守られ、敵潜水艦の魚雷攻撃に備えてジグザグコースをとっていた。感傷にひたる余裕はないが、船内には「ああ堂々の輸送船」といった勇ましさはなく、危機に立ち向かうような悲壮感が漂っていた。

甲板から繩梯子で暗い船倉に降りる。人間の乗るところではない。蚕棚式の鉄製の棚があり、そこがわれわれの居住空間だった。天井は低く私のような小柄な男でさえ腰をかがめる。薄暗い裸電球があちこちにぶら下がっている。換気はなくムーンとしていた。

われわれといえは、小銃に帯剣、鉄帽に背袋、雑囊から被甲まで、銃弾こそ支給されていないがほぼ完全軍装、さらに直径十センチほどの孟宗竹を節のところを切り、三本を紐でつないだ救命胴衣が全員に支給されていた。すべてが嵩張って鎧兜の戦国武者のように転ばないようノッシノッシと股を広げて歩く。

立つてはいられないので横になる。たたみ一畳ほどのスペースにはぼ三人、過密で寝返りもうてない。兵隊たちは小銃を抱えて小さくなっていた。突然「グワン」と凄まじい音と震動が伝わってきた。「全員、甲板に集合！」甲高い叫び声。ついに来た。兵隊たちは先を争って、たった一本の縄梯子に殺到する。これは訓練ではない。混乱が起きないはずはない。「慌てるな」と私は自分に言い聞かせると、要領のわるい初年兵の姿を眼で追っていた。

甲板の集合場所は予め決められていなかった。各部隊の分隊長は部下の掌握に躍起になっていた。「番号！」の号令が交差する。整列をおわった兵隊たちは

黙って、荒れる海上を見つめていた。

新鋭の護衛艦だったらしく、敵潜も容易に船団に近付けず、時限機雷を船団の進路に仕掛けたらしい。あちこちから轟音とともに大きな水柱が立ちのぼる。

「杭州丸」は激しく震動し、水しぶきが降りかかる。

船団は全速力で退避を開始した。その周りを護衛艦が輪を描いて疾走する。波を蹴立てて、艦首から白く吹き上げられた潮が甲板を洗っているのがよく見える。駆逐艦がこんなに速いものだとは知らなかった。

艦の後部からドラム缶のような爆雷が左右に一個ずつ空中に発射される。それが海面を盛り上げ、水中で凄まじい爆発音を轟かせる。そのたびに古い「杭州丸」は船腹が裂けるか、リベットがとんでしまうのではないかと思えるほどの衝撃を受ける。護衛艦からモールの灯火信号が発信されている。「ご安心を乞う」だった。

しばらくすると双発の海軍機「銀河」が低空で飛来した。船団の上空を二、三回旋回し、大きく翼を振ると帰っていった。やがて日が暮れた。

船倉に戻っても嚴重な灯火管制で自分の手も見えない。仕方なく甲板でうずくまる。灰色の空が白ぼんできた。視界はよくないが海上には僚船も護衛艦も消えて「杭州丸」はただ一隻で大海原を走っていた。最高八ノットの老朽船は僚船についていけなかったのか。

島影が近づき静かな入り江に停泊した。天草の牛深と聞かされた。長崎に寄港し、五島列島の福江に向かっていたころから海が荒れだした。雨と風が次第に激しくなってきた。

名にし負う玄界灘である。三千トンのオンボロ船は荒波に翻弄されはじめた。大きなうねりに乗ると船体が傾斜してマストより高い波が押し寄せる。天に昇ったかと思えば、引きずり込まれるように奈落の底に落ちていく。素人目にはもう敵どころではない。

「杭州丸」の船長はこのチャンスを見逃さなかった。敵潜の魚雷など考えなくてもよい。船はまっしぐらに南進を開始した。船体がギンギンと悲鳴をあげ、スクリーンの空回りする音が唸りのように聞こえる。

船員以外のほとんどは船酔いで起き上がれなくなっていた。

一夜明けて天候が序々に回復してきた。波は一時より治まったとはいえ、まだ進退の重心が揺れている。

困るのは便所である。平時であれば、乗組員の少ない貨物船なので便所は一カ所しかない。当然兵隊は使用禁止である。代わりに船の左舷の外側に縦横一メートルほどの簡単な木枠を作り、それを麻縄でしっかりと鉄の柵に縛りつけてある。扉や遮蔽があるわけではなく、誰からも丸見えである。兵隊たちは鉄柵を跨いでその木枠にしがみつき、尻を出して遙か下方の海面に向かってバクダン投下をするのである。もちろんクソは海面まで届かない。強い潮風に飛ばされて霧散してしまふ。船は揺れている。足を踏み外したらクソと一緒に荒海に放り出されてしまふ。海が荒れると、おそろしさにクソを我慢する兵隊が多かった。

海路十日ばかり、「杭州丸」は二月二十六日朝、すでに廃虚となっていた那覇の港に静かに着岸した。

この第十六航空通信隊の概要について触れておきたい。激しい戦闘で中隊指揮班の書類はすべて失われ、下士官以上の幹部のほとんどが戦死をしているので不明な点も多く、生存者の記憶に頼るしかない。

この部隊は昭和二十年一月二十六日、兵庫県丹波篠山の第三十一航空通信連隊（中部百十部隊）で編成された。通信隊長は夜差徳三中尉、指揮班と三個小隊、九個分隊、総勢百九十四人であった。

将校は五人、下士官は十二人、特幹（当時上等兵）は三十四人であった。数少ない将校の中には、昭和十八年十二月に学徒出陣した見習士官一人がいた。

下士官のほとんどは少飛出身（第十一期～十四期）と学徒出陣の乙幹の伍長で占められていた。

兵隊は三十一航通へ昭和十九年八月に入隊した初年兵が百四十人近く、彼らはモールス、送受信機の操作など基本的な通信技能さえ教育されていなかった。

新しい部隊であったためか、昭和十六年十二月の日米開戦時に兵役にあった者（軍歴正味三年以上）は百九十四人中、五人前後しかなかったであろう。

甲板から見る那覇の港は見渡すかぎり瓦礫の街だった。港から県庁のあった街の中心部まで完全に破壊され、人影さえ見えない。遠く小高くなったあたりに鳥居がポツンと立っているのが見えた。

前年の十月十日、イレズミのブルと言われた暴れん坊、ハルゼー中将麾下の米第三艦隊（高速機動空母部隊）の艦載機の仕業である。沖縄では「十空襲」といって語り草になっている。

われわれ第十六航空通信隊の任地は台湾の屏東であったが、敵機動部隊の動きからもうこれ以上の南進は無理と判断され、沖縄配備に変更された。その結果、沖縄本島中部の読谷飛行場に展開していた第八飛行師団所属の第二航空通信隊の分遣隊（誠一九一五九）が編成された。通信隊長の小鷲武夫少佐は、米軍上陸のわずか半月前の三月十五日に沖縄に着任している。

そしてわれわれ夜差中隊は三月二十二日、鹿児島県徳之島への転進命令を受けている。翌二十三日早朝から、那覇港では無線機材の積み込み作業が始まろうとしていた。時すでに遅く、作業開始とはほぼ同時に敵艦

載機による本格的な攻撃が那覇港にくわえられた。停泊中の輸送船は隊員たちの目の前で撃沈されてしまい、われわれの転進計画は中止された。まさにわれわれ百九十二人の運命は暴風に漂う「杭州丸」のように翻弄されていた。振り返って見ると、この慌ただしさは、やがて襲ってくる壮絶な沖繩戦の予兆だったのだろう。

昭和二十年四月一日、米軍は沖繩本島中部の西海岸に上陸を開始した。上陸部隊約十八万、支援艦船は第五十八機動部隊を主力とする千五百隻であった。

同日付をもって夜差中隊からは野戦部隊の第二十四師団へ八十人、特編旅団へ四十人、計百二十人が転属命令を受け、急遽、航空通信隊から離れていった。このほかにも私のように、別途に命令をうけ野戦部隊へ転属し戦闘に参加している兵隊がいたはずである。

結局、本隊の航空通信隊に残された隊員は六十人前後と思われる。このころから艦載機の攻撃と艦砲射撃による戦死者・負傷者の続出、野戦部隊への転出など

で航空通信隊の兵員数の把握が困難となっていた。激しい戦場ではにっちもさっちも曜日も意識がない。昼夜さえ関係ないのである。その日がいつだったか。自分でもわからない。天長節は過ぎていた。完全軍装に身を包んだ私は、見知らぬ仲間たちと一緒に首里の軍司令部を出て北部の戦場に向かって歩いていった。

度重なる移動で、身につけていた帯剣以外の装備はすべて行方不明になってしまった。小柄な私は特に希望して三八式騎兵銃を受領していた。同じ部隊の兵隊たちのほとんどは九九式短小銃だったので、弾薬の補給に多少の不安はあった。左右と後の薬盒には実弾が詰め込まれ、軍袴の物入れには手榴弾のゴツゴツした感触があった。襟には兵長の階級章をつけていた。

敵上陸からはぼ一カ月、中部地域を戦区とする第六十二師団は敵の陸・海・空からの圧倒的な火力に押しされ、兵力の消耗が激しく、戦線を維持しながらも後退を余儀なくされていた。

「総攻撃」兵隊たちの囁きが聞こえてくる。戦場の恐怖、生へのあきらめ、見敵必殺の意気込みなどが脳裏をめぐり、私は自分自身の交叉方位を見失っていた。

紙幅がないので肝心の戦闘体験の詳細に触れることができないので経験談にとどめたい。

歩兵部隊と違ってわれわれ通信兵の訓練は通信実技におかれていたため、第一線では戸惑うことが多かった。

戦場の洗礼は敵艦載機の対地攻撃と艦砲射撃から始まった。いきなり飛んでくるのは艦砲弾である。一カ月も、しかも毎日、昼夜を分かつたずこれを浴びせられると、飛来する砲弾の風を切る音で着弾位置を判断することができない。至近弾は「シー！」と音を立てて地面に突き刺さる。大型砲弾であれば助かりようはないが、中型以下であればその炸裂と身を伏せる数分の一秒差が生死を分ける。直撃を別にすれば、反射神経の敏感な兵隊の生存率は高い。女子供や老人などの非戦闘員がこれを避けるのは無理であろう。

危険は二度ある。空中に舞い上がった砲弾片が真っ赤に燃えブルブルと音を立てて落下する。銃弾と違って弾片は大きいのでこれに当たれば助からない。前者は反射神経、後者は運命としか言いようがない。

私も首里南方の津嘉山で至近弾を受けている。幸いに弾片を浴びることはなかったが、爆風圧で数日は意識不明の状態と、左耳の鼓膜を破ってしまった。

小銃の有効射程距離は三百メートルと聞かされていた。恐怖心から敵が近くに見える。目測に慣れるのにかなりの時間を要するため、貴重な弾丸をムダにすることが多かった。戦闘の初期は興奮のため手が震え、照星・照門を合わせることなく発射していた。

戦闘は雨期、小銃は泥水に浸かり、手入れする余裕もなければ器具もない。銃口を泥の中に突っ込み、銃腔が粘土状の泥で詰まってしまう。覆いのない遊底には泥水が入り、弾倉から次弾が出てこなかったり、弾丸を装填するときに薬室にまで泥が入り、ガリガリと砂を噛む感触が楯杆にまで伝わってくる。これで何発か発射すると銃身が焼けて焦げた匂いがしてくる。ま

た積杆が重くなって、空葉莢が容易に跳び出してこない。弾丸は敵兵まで届いてくれただろうか。

一方、敵は艦砲、艦載機、榴弾砲、迫撃砲、戦車砲、火焰放射器など多彩な武器を使って攻めてくる。彼我の間合い感覚に大きな違いがある。困るのは敵の使用する武器についての知識がまったくなく、使った。戦車の吹き出す火焰など予想を超えて百メートルにも達する。それが分かったときは殺られてい

る。手榴弾は軍袴の物入れに入れておく。戦闘中は走り伏せたりするので、これの起爆棒（正式の名称は知らない）が取れてしまう。ピンがついているので内部の信管を叩くことはないと思うが、何とも不気味である。また雨水に浸かった手榴弾は発火するのだろうか。これは敵と接近したときしか使わない。爆発しなかったらこちらが危ない。

陸戦は彼我の武器に対する知識、合理的な教育がなければ、徒に戦死者を増やすだけである。

戦闘を継続するうえで欠かせないのは補給である。

敵は本部との命令・報告などのルート、武器弾薬や食料の補給路を砲撃してくる。第一線の兵隊は飢えてしまう。沖繩本島の中南部の畑には砂糖黍・芋・キャベツなどが植えられていたが、戦闘初期にほとんど食べ尽くされてしまった。弾痕に溜る雨水だけでは戦闘は継続できない。部隊は水を求めて後退する。

戦場では体力が消耗しても、激しく走ることが要求される。ムダなものは捨てて身軽になる必要がある。まず被甲、次に薬盒を捨て弾丸は物入れか雑囊にバラして入れる。帯剣の鞘まで邪魔になり抜き身をそのまま帯革に差す。私など体力の消耗から重い鉄帽まで捨ててしまった。被弾の危険と体力との優先順位を考えながら、あとは運命に頼るしかない。

小銃は自分の命より大切なもの、と教えられた。しかし敵戦車に追われ体力の限界を感じたときには、これを放置してしまう。また後方で山野に転がる日本兵の死体の持っていたものを拾って使えばよいのだから。

「生死をともし」と誓った戦友が被弾する。それが小銃の貫通創のような軽傷であっても、足の負傷では動けない。砲弾の飛び交う戦場で負傷兵を搬送する余力は誰にもない。また二人分の食料・水を調達することも不可能である。敵はまじかに迫ってくる。そのまま放置するか、介護して死をともしにするかの二者択一しか許されない。これは沖縄戦の生存者に共通する負い目である。戦場とはかくも苛烈なものであった。

私は、もうこのまま野山に倒れて死んでしまいたいと思うことが何度かあった。戦闘を重ね、分隊員が次々と少なくなっていく状況から、自分の生存の可能性はゼロと確信するようになっていった。

「軍の主とするところは戦闘なり。故に……」という軍人の基本理念が心の支えになっていた。簡単に玉砕してしまつてよいのだろうか。「執拗な戦闘の継続と合理性」これが十七歳の私の精いっぱい判断力だった。

地形の複雑な戦場では、昼間でも方向感覚を失うことがある。しかし兵隊たちは敵と味方の方向だけは敏

感にかぎ分ける。「ッターン！ タターン！」という戦車砲の発射音、「ッポン！ ッポン！」と聞こえる迫撃砲の発射音、これが敵のものであることは誰にも分かる。

戦闘を重ねるうちに兵員の消耗から部隊は編成がなされる。部隊の求心力は弱まり、後退する戦場では本隊とはぐれてしまう兵隊が続出した。私もその一人となつてしまった。いわゆる戦場の迷子である。

そのような個人が集団化して、沖縄戦では多くの敗残兵が生まれてしまった。この敗残兵にもいろいろある。部隊がほとんど壊滅した兵、被弾して放置された兵、自分の意思で戦場を離脱した兵、師団司令部・連隊本部など上部機構の後退・移動で連絡がとれず指揮命令系統を失つた分隊員などである。

敗残兵は武器弾薬・食料を他部隊からもらい受けるか、盗む、強奪するかなどして自分たちで調達するしかない。路傍・山野には多数の戦死者や重傷者が放置されている。兵隊たち（私）は先を争って食料・銃弾

を求めて雑囊を探る。まさに禿鷹の争いである。

敗残兵といっても軍人である以上、敵との戦闘を放棄したわけでない。上部との指揮命令系統を見失っただけである。

私は本島南部（島尻）の八重瀬岳周辺の戦闘で敵に包囲され、突破のときに敗残兵集団の仲間とはぐれて再び一人になってしまった。島の南端まで追い詰められ、もう頼るところはない。軍司令部周辺にいると思われる原隊の航空通信隊を探すことにした。

六月初旬だった。私は本島南端に近い摩文仁の軍司令部にたどりつき原隊に復帰することができた。

第二十一航空通信隊は多くの戦死者を出しながらも任務の遂行に懸命だった。大型の地一号無線機を使って、軍司令部とわれわれの本隊である台湾の第八飛行師団司令部との電文の送受信に当たっていた。

暗号の組み立て翻訳、無線機の操作などすべての作業は航空通信学校出身の少飛と特幹が主体となっていた。この任務も第一線と同じく困難を極めていた。

雨は降り続き、無線機には覆いが掛けられる。温度が上がりすぎて発振管が加熱し、出力が落ちてくる。電波が相手に届かない。「カム・カム」（感度なし）相手も懸命になってこちらを呼んでいる。電圧を上げると水晶片（一定の周波数を安定して発信させる）が破損してしまふ。予備の部品はほとんどない。発電機のカンクリンと潤滑油は残り少ない。点火栓（プラグ）の火花が出ない。ピストンリングは折損する。部品の一つでも欠ければ通信機能は完全に停止してしまふ。

敵が接近し、軍司令部と航空通信隊との連絡も途絶えた。敵戦車の直撃弾が周辺に炸裂する。最後の時がきた。無線機はわれわれの手榴弾で破壊された。

上部からの指令はない。部隊は解散状態になってしまった。隊員たちは仲間同士で集団化し、隆起した珊瑚礁でできた巨岩の間をぬって海岸方向に逃れていた。

最期には軍司令部から「全軍突撃」の命令があるものと兵隊たちの誰もが信じていた。しかし、指揮命令

系統を失ったいま、突撃命令の伝達手段さえなくなっていた。師団司令部や連隊本部は麾下部隊の掌握もできなくなっていた。これが一カ月前の首里の戦線であれば壮絶な全軍突撃ができたであろう。

敵上陸以来はぼ三カ月、兵は飢えに苦しみ、精神的にも人間の耐えられる限界を超えてしまったのだから。弾丸も使い尽くされてしまった。

戦車砲・迫撃砲・火焰放射などによる敵の総攻撃が開始された。軍司令部のある摩文仁の丘からは一発の砲も機銃さえも火を噴くことはなかった。聞こえるのは散発的な小銃の発射音だけである。

日暮れを待って私も海岸へ逃れていった。水際には多くの兵がうずくまったり退路を求めて右往左往していた。後には摩文仁の丘が黒々と横たわっていた。

## 陸軍特別幹部候補生

### 長岡原の青春

東京都 村田 貫 二

特幹の操縦の適性検査に落ちて、失意のどん底に浸っていた私の手元に、昭和十九（一九四四）年四月十二日、「特別幹部候補生ニ決定ス。仍テ左記ノ通入校スベシ」という、陸軍航空本部長よりのがきの通知書を受け取った。それで、私は四月二十日の午前八時まで、茨城県長岡村の「長岡陸軍航空通信学校」（この名称は、戦後、加藤実候補生から借りた「軍隊手牒」によると、「昭和十九年四月二十一日陸軍密第三二九四号ニヨリ陸軍航空通信学校長岡教育隊ト改称」とある）へ入校することになったのである。

忘れもしない昭和十九年四月十九日の朝、あいにく小雨そぼ降る中、私はたくさんの日の丸の旗を持った